

筑紫（九州）万葉集と風景画シリーズ（第八回）

「筑紫の船旅」

おか みなと

「岡の水門（一）」

あまき

ひかた

みづくき

天霧らひ 日方吹くらし 水莖の
岡の水門に 波立ち渡る

卷七―一二三二

作者 未詳

（解説）

空一面にかき曇らせて東南の風が吹くらしい。遠賀川の河口に波が一面に立っている。

・「天霧らひ」とは空を一面に曇らせる。 ・「日方」とは日のある方から吹く風の意。南東風、または南西風をいう。 ・「水門」とは河口、海口、海峡、湾の船の碇泊また航行すべき所

◎遠賀川河口の兩岸に跨る福岡県遠賀郡芦屋町は右（東）岸に山鹿

地区、左（西）岸に芦屋地区があり、古代から大小の船が出入りする良港で、海上交通の要衝として遠賀川流域の米や産物が

ここに集積され都に運ばれていた。

・東岸にある山鹿地区側の平地が古昔は湾入こせきしていた入江と考えられ、万葉時代の「岡の水門」に推定されている。

・「岡の水門」は古くは「岡の津」、「岡の浦」などとも呼ばれ、響灘や遠賀川を航行する船舶の碇泊の地でもあつたと伝えられている。

☐この歌は「羈旅きりよ（旅）」にして作れる歌」の一首で林田正男『万葉

の歌』は、「作者は未詳であるが、都人だとすれば、都と大宰府との官路に関連する道筋であるので旅びと（航海者）として港の実況を目撃しその感慨を詠じたものか。」と述べている。

☐遠賀川は、福岡県のほぼ中央に位置する嘉麻市と甘木市の境にある馬見山（978m）などを源とし飯塚市など筑豊地域の平野部を北へ流れ、河口にある遠賀郡芦屋町を二分して響灘（山口県西方く福岡県北方の海域）に注ぐ全長約六三キロの一級河川である。

・遠賀川は江戸時代から明治時代にかけては鉄道が敷かれるまで、沢山の川船が上下し上流の筑豊地域の炭田（現・田川、嘉麻、飯塚、直方、中間の5市を中心とした炭田。）から石炭が運ばれ、芦屋町はその集積所として栄えた。

◎今、芦屋町は古くに大船を入れた港もなくなり、観光の町、隣接する北九州工業地帯の郊外住宅地、玄界灘・響灘の漁業基地としての港町として大きく変貌している。

◎遠賀川河口に位置する芦屋町（山鹿地区）へはJR鹿兒島本線「折尾駅（北九州市）」から北九州市営バス「粟屋」行で30分程乗車し「山鹿郵便局前」で下車、10分程歩き小高い丘に通じる坂を上ると芦屋町山鹿地区にある海拔70mの丘陵地に広がる魚見公園に着く。

◎台地にある公園からは響灘から西に万葉集（巻七―一二三〇）に詠われる「鐘の岬（宗像市）」あたりと対岸に玄界灘と響灘との境

に浮かぶ小島「地の島（宗像市）」などの島々が眺望できる。

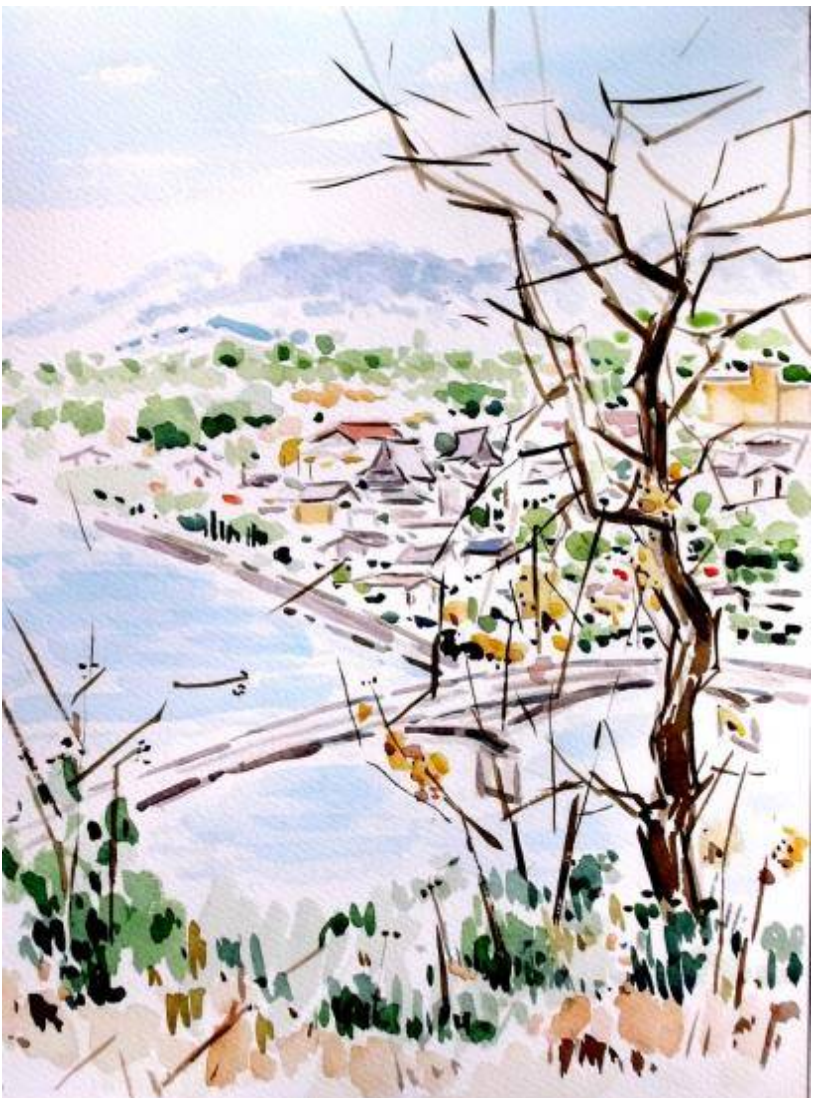


・また、公園の眼下に遠賀川河口、対岸には河口一帯に広がる芦屋町芦屋地区の市街地と海岸などが一望できる景勝の地であるが、丘陵地にある公園にはこの万葉歌に詠われている「日方」ではないかと思われるほどの強い風が響灘から吹きつけ、眼下の河口岸壁周辺には大きな白波がたち、時折その横を小船が大きなエンジン音をたてながら遠賀川を南へ向って上っていく風景が見渡せる。

（写生地）古代の「岡の水門」と推定される遠賀川河口右岸（芦屋町山鹿地区）に面した小高い丘の上にある魚見公園西端から眼下に望む遠賀川河口および芦屋町芦屋地区と山鹿地区に架かる

「なみかけ大橋」と対岸の河口一帯に広がる芦屋町芦屋地区の市

街地などの風景を描く。(池田杏花)



「筑紫の船旅(二)」

かしこ

しか

大海の 波は恐し 然れども 神をいのり

ふなで

て 船出せばいかに

卷七—二二三— 作者 未詳

(解説) 大きな海原にたつ波は恐ろしい。けれども、海

神(志賀の皇神)に祈って船出したらどうである

かこ

うか。という意で、船頭や水夫などに問いかける

形で詠まれている。

・この歌は〈きりよ羈旅（旅）に作れる歌〉の一首で林田正男『万葉の歌』は「宗像市鐘崎の北端にある岬と沖にある地の島間の航海上の難所を通過する際の歌「鐘の岬（巻七―一二三〇）」と（前記一）の「岡の水門（巻七―一二三二）」の歌とこの歌（巻七―一二三二）の三首が一組の歌と考えられる。」と述べている。

また、これら三首は「博多の港から鐘の岬（宗像市）遠賀川の河口を経て、都に上る、「筑紫の船旅の歌。」であるとする説がある。

④この歌は、都に上るため「岡の水門」から、「飛幡（今の北九州市戸畑）」へ抜ける水路にて洞海湾に向かつて船出しようとした時のものと思われるとの説がある。

・「岡の水門」に推定される遠賀川河口にある遠賀郡芦屋町山鹿地区付近から北九州市若松区と八幡西区の境界にある洞海湾口を結ぶ河川として「江川」が流れている。

・「筑前風土記」などによると岡の水門と洞海湾との古代の水路は

今の福岡県北九州市若松区や遠賀郡芦屋町北側の外海「響灘」が波が荒く危険が伴うため、安全な内陸航路であった江川を利用し岡の水門と洞海湾の間を航行していたと見られている。

「江川」は東は洞海湾に注ぎ、西は遠賀川の河口に合流し、遠賀川は響灘に注ぐ、そのため川の流れは、二つの海の潮の干満に影響される。

・江川は近代、洞海湾の新田、塩田等の開発により埋め立てられ水路は古代と大きく変貌しているが今も洞海湾奥と遠賀郡芦屋町付近の遠賀川河口を結び流れている。

☐洞海湾は現・北九州市の八幡東区・八幡西区・若松区・戸畑区に

囲まれた入江である。

☒洞海湾から遠賀川河口に向かって流れる「江川」河口付近。

(洞海湾東・都島展望公園(北九州市戸畑区)から撮影)



☑ 洞海湾沿湾に面する飛幡(現・戸畑)には次の歌が詠われている。

とはた うら

「飛幡の浦(三)」

ほととぎす 飛幡の浦に しく波の
しばしば君を 見むよしもがも

卷十二―三二六五 作者 未詳

(解説) ほととぎすが飛ぶという その飛幡の浦に繰り返し寄せ
る波のように、しばしば君を見る手だてがほしいものです。

- ・ 歌の題詞は「きりよはっし 羈旅発思(旅先にあつて思いを述べた歌)」の一首
- ・ 戸畑市教育委員会資料によると、この歌は「・・・古へ都より
大宰府へ往来せる奈良時代の官人が飛幡の浦を過ぐる時、詠みき

と伝える。「飛幡」は筑前風土記に「鳥旗」とあり。後に「戸畑」の字を

用ひて今に至れり。」と記されている。

・滝口弘「九州の万葉」は「作者がつらい旅に出て、故郷を思い、妻を懐かしむ心切なるもののある時、洞海湾の入口辺りに間断なく打ち寄せる波を見て、その心境を詠んだものと思われる。」と述べている。

☐「飛幡の浦」

飛幡の浦は、「万葉集地名歌総覧」には筑前国遠賀郡戸畑村（現・北

九州市戸畑区）の海岸。筑前国の東端、洞ノ海（洞海湾）の湾口

に位置し、豊前国企救郡（現・北九州市小倉北区）と隣接する。

静かな漁村であったが、近代に入り様相が一変した。「筑前国風土

記に〈鳥旗ノ澳とほたとあり、西方の遠賀川河口の塙お舸ノ水門〈岡ノ

水門一二三くまと岫門（水路）により通じていた。〉と記されている。

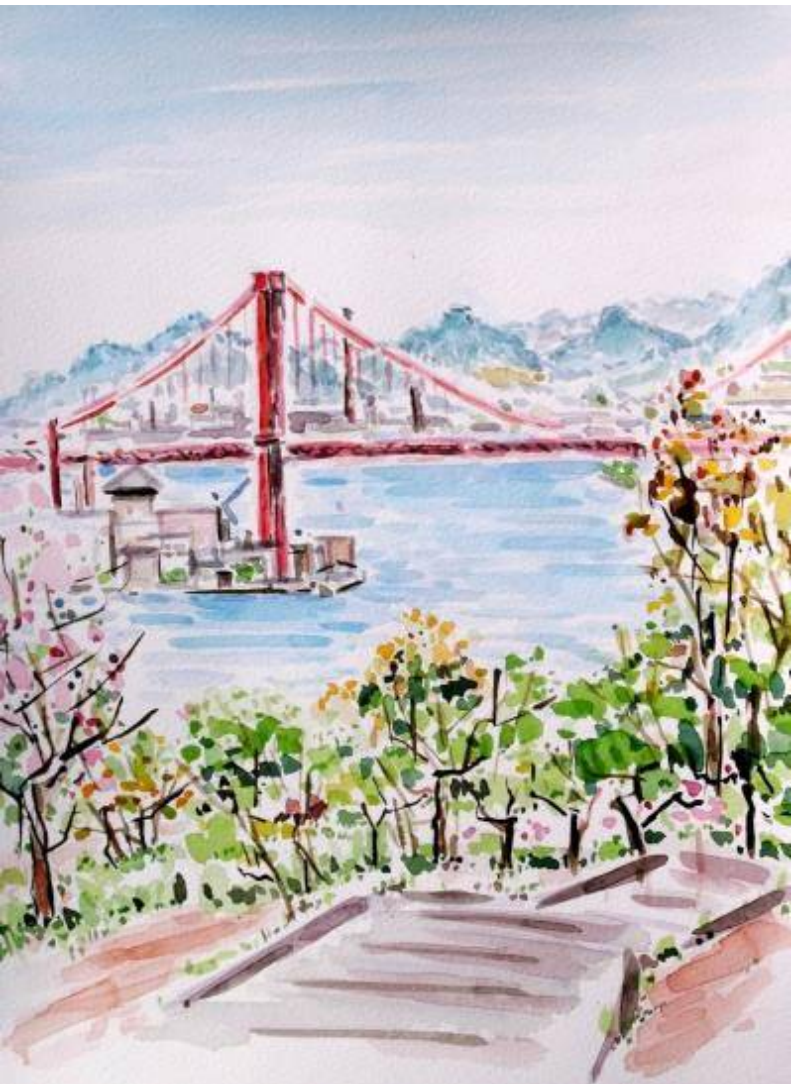
・戸畑は北九州市の中央部に位置し区域の北部、北西部の海岸は

洞海湾に面し北東部は響灘・関門海峡に面してる。

（写生地）JR鹿児島本線「戸畑駅（北九州市）」から南へ旧唐津・

長崎街道をつなぐ往還道である都島古道を30分程歩くと洞海湾に面した高さ70mあまりの丘陵地にある都島展望公園（戸畑区牧山）につく。この公園のある丘の頂き近くにある展望台からは真正面に洞海湾の左（西）岸の若松区と右（東）岸の戸畑区を結ぶ日本初の長大吊橋として昭和37年に開通した若戸大橋の壮大な風景が目飛び込む、さらに洞海湾沿岸部は大半が埋め立てられ北九州工業地帯として変貌し工場が林立しており万葉集に歌われた「飛幡の浦」の面影は見ることができない。

・公園展望台から洞海湾に架かる若戸大橋と左岸に若松の渡船所、右岸に戸畑の街並、遠景に対岸の山口の山々を描く。（池田杏花）



〔参考文献〕「万葉の歌・林田正男」 「万葉集地名歌総覧」 「九州の万葉」 「万葉集全注」 他



〔参考〕 岡の水門（芦屋町・山鹿地区） 飛幡の浦（洞海湾） 位置図